

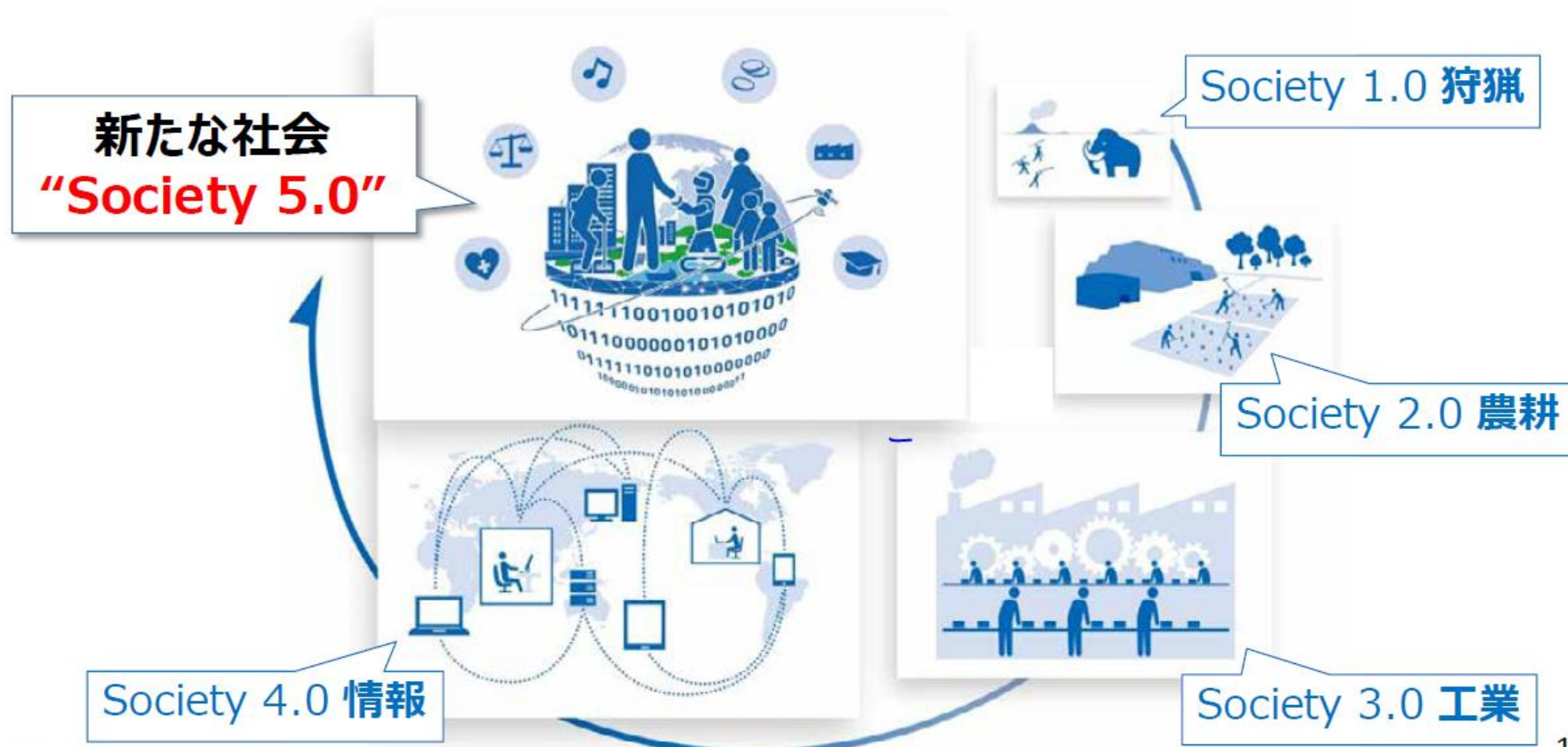
「Society 5.0時代のデジタル人材育成に関する検討会」 における議論内容について

商務情報政策局 情報技術利用促進課

Society 5.0とは

Society 5.0とは

サイバー空間とフィジカル（現実）空間を高度に融合させたシステムにより、
経済発展と社会的課題の解決を両立する、
人間中心の**社会（Society）**

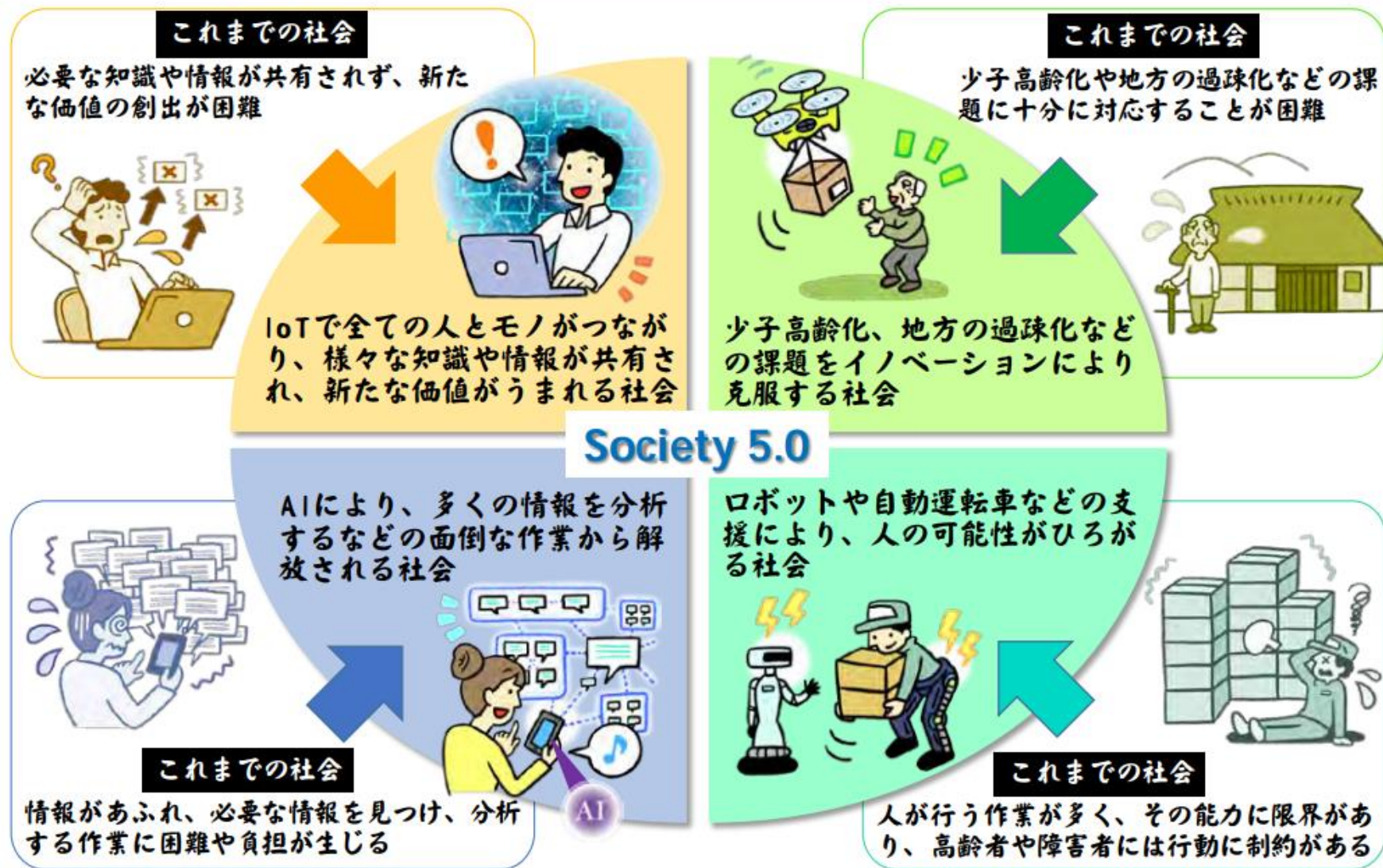


[内閣府作成]

出典：Society 5.0「Society 5.0とは」（内閣府）（https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/society5_0-1.pdf）

Society 5.0で実現する社会

Society 5.0で実現する社会

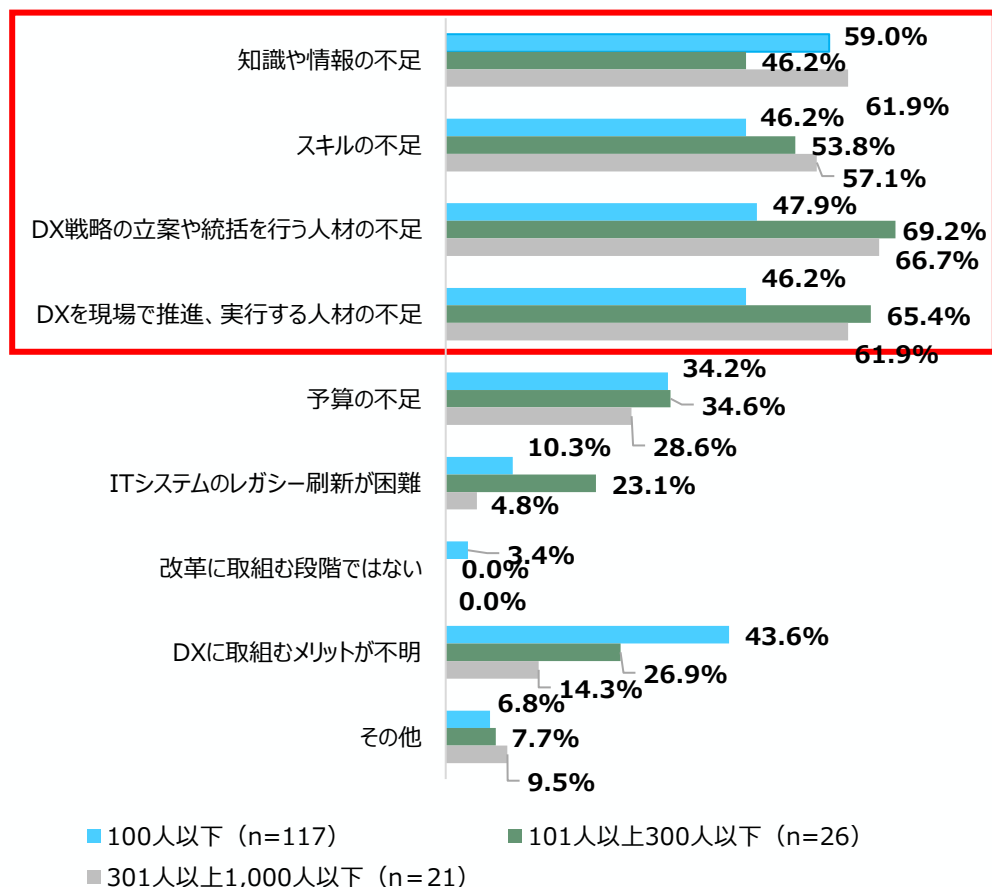


[内閣府作成]

日本企業におけるDXの現状

企業がDXに取り組まない理由

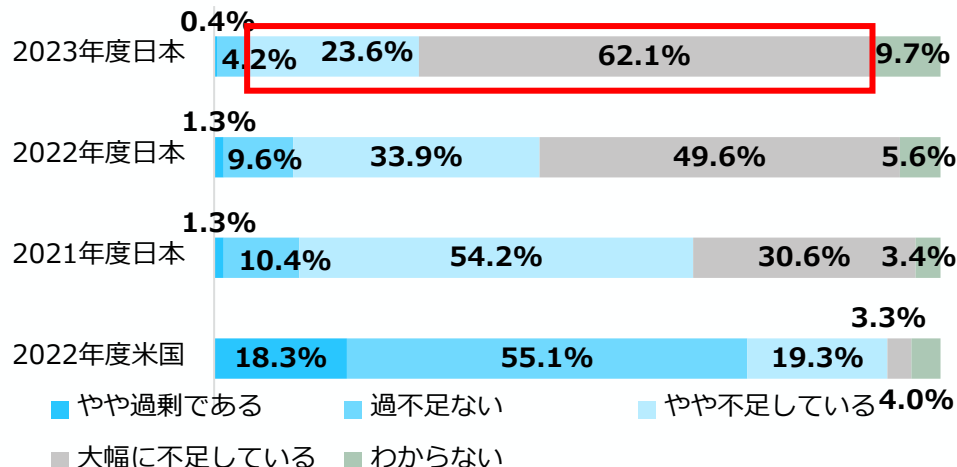
- DX推進の主な課題は、「人材不足」「知識・情報不足」「スキル不足」が上位にあり、デジタル人材の育成・確保、経営者・企業の意識改革が本質的に重要。



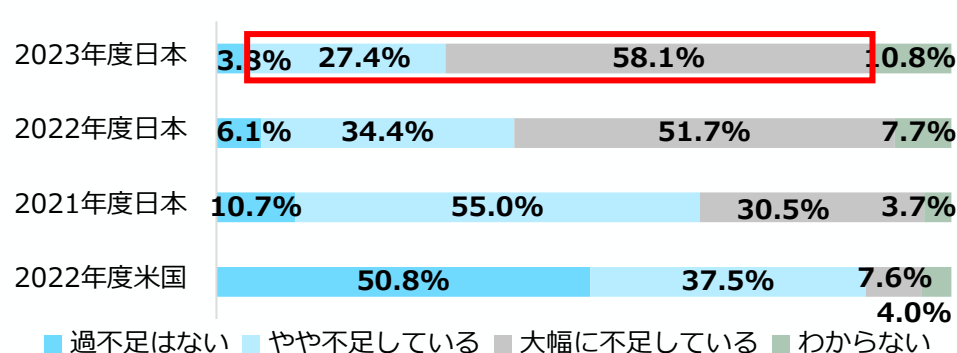
DXを推進する人材の確保状況

- DXを推進する人材の不足感は「量」及び「質」双方において急速に強くなっている。

DXを推進する人材の「量」の確保



DXを推進する人材の「質」の確保



デジタルガバナンス・コード3.0

- 経営者がDXによる企業価値向上の推進のために実践することが必要な事項をとりまとめ。
- 改訂版の3.0では、①DX経営による企業価値向上に焦点を当てた経営者へのメッセージとDX経営に求められる3つの視点を追加するとともに、②柱立ての名称・構成を大幅に見直し。

DX経営に求められる3つの視点・5つの柱

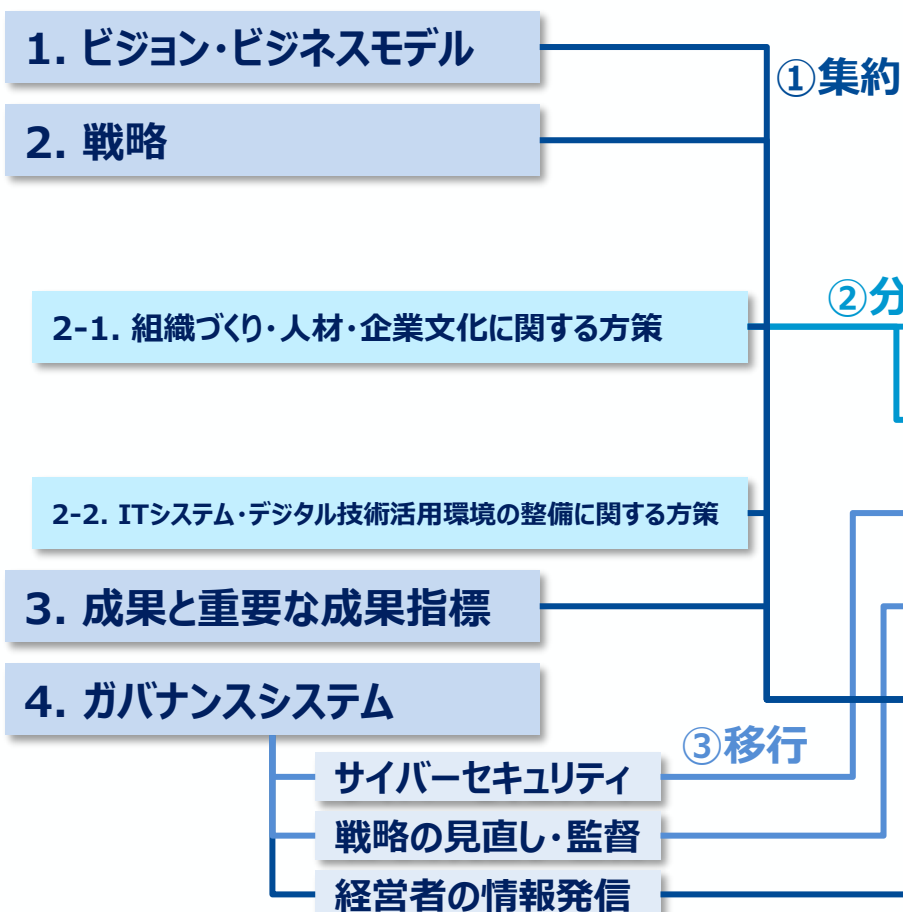
企業価値向上の実現



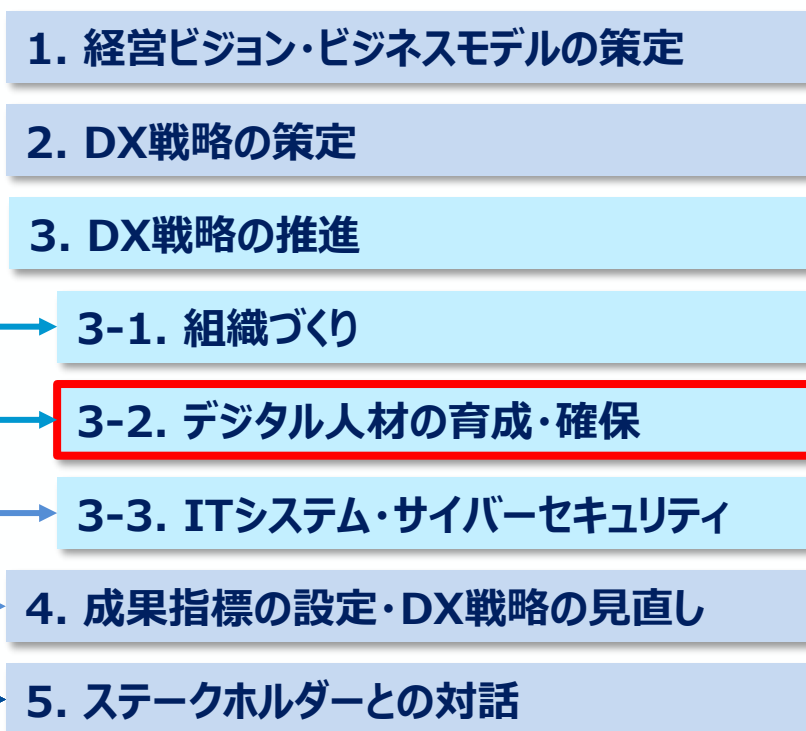
デジタルガバナンス・コードの柱立ての見直し

- ①各柱のステークホルダーへの開示関係を集約、②デジタル人材を新たに柱として記載、③ガバナンスシステムの各項目は関連する柱に移行した上で、各柱の名称を見直し。

改訂前（デジタルガバナンス・コード2.0）



改訂後（デジタルガバナンス・コード3.0）

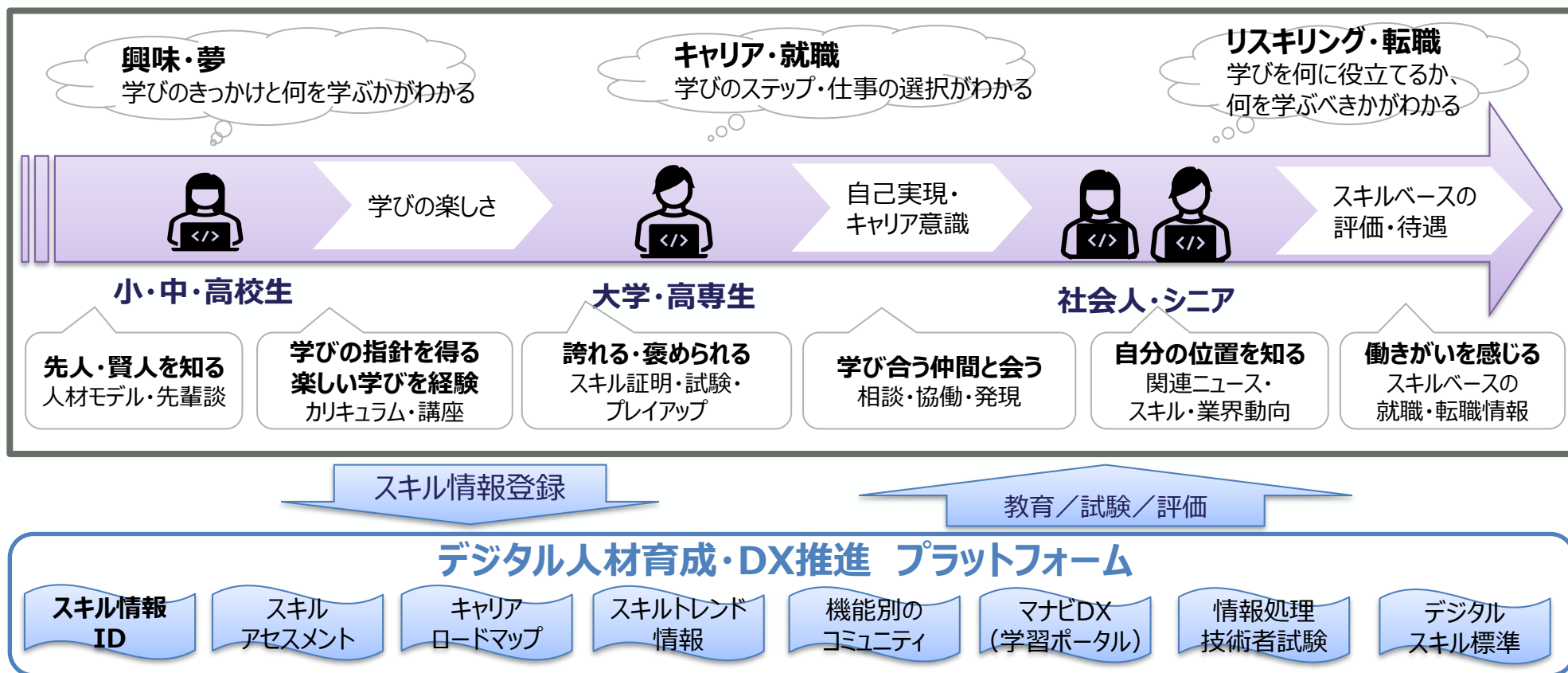


検討の背景と課題

1. 「**デジタルスキル標準**」を策定して以降、リスキリングの「供給」面は、各省の施策、民間の取組により充実してきているが、**需要側（＝学ぶ人々）の反応が見えず、効果検証も難しい状況。**
2. より本質的な問題として、現在の労働市場では、**スキルを持った人が適切に評価されにくい状況**にある。
(※諸外国では、**スキル情報を蓄積・可視化し、個人のスキル情報に基づいて評価・採用が行われる機能**が存在。)
3. 生成A Iの登場により、「変化をいとわず学び続ける時代」に。
個々人が**前向きにデジタルを学びつつけるための環境整備**が必要。

スキル情報基盤整備に向けた政策の方向性：目指すべき姿

- 業種を問わずあらゆる企業・業種で働く人々、そしてこれから社会に出る学生に対して重層的にアプローチをしていくことが必要。
- スキルベースで学び続け、評価され、キャリア設計するため、個人起点のスキルアップや生涯学習としてスキルを学ぶ基盤として、様々な情報や学びの価値の提供を目指す。



スキル情報基盤整備に向けた政策の方向性：具体的な方向性

- 自身の目標に向けてスキルアップを続けるデジタル人材が一層活躍できる環境整備が必要。
- そのため、個人のデジタルスキル情報の蓄積・可視化により、デジタル技術の継続的な学びを実現するとともに、スキル情報を広く労働市場で活用するための仕組みとして「デジタル人材育成・DX推進プラットフォーム（仮称）」を検討。

【個人】スキル情報の蓄積・可視化を通じた
継続的な学びと目的をもったキャリア形成

情報登録

教育・試験

（IPA）デジタル人材育成・DX推進プラットフォーム（仮称）

- ✓ スキル情報の蓄積・可視化を可能とする個人向けアカウントの立ち上げ
- ✓ デジタルスキル標準の活用推進
- ✓ 情報処理技術者試験、リスキングで得たスキル情報の蓄積と証明
- ✓ スキル情報の分析と共有を通じたリスキング機会の拡大

講座申請・活動報告

スキルトレンド

DX認定申請・活動報告

DX支援サービス

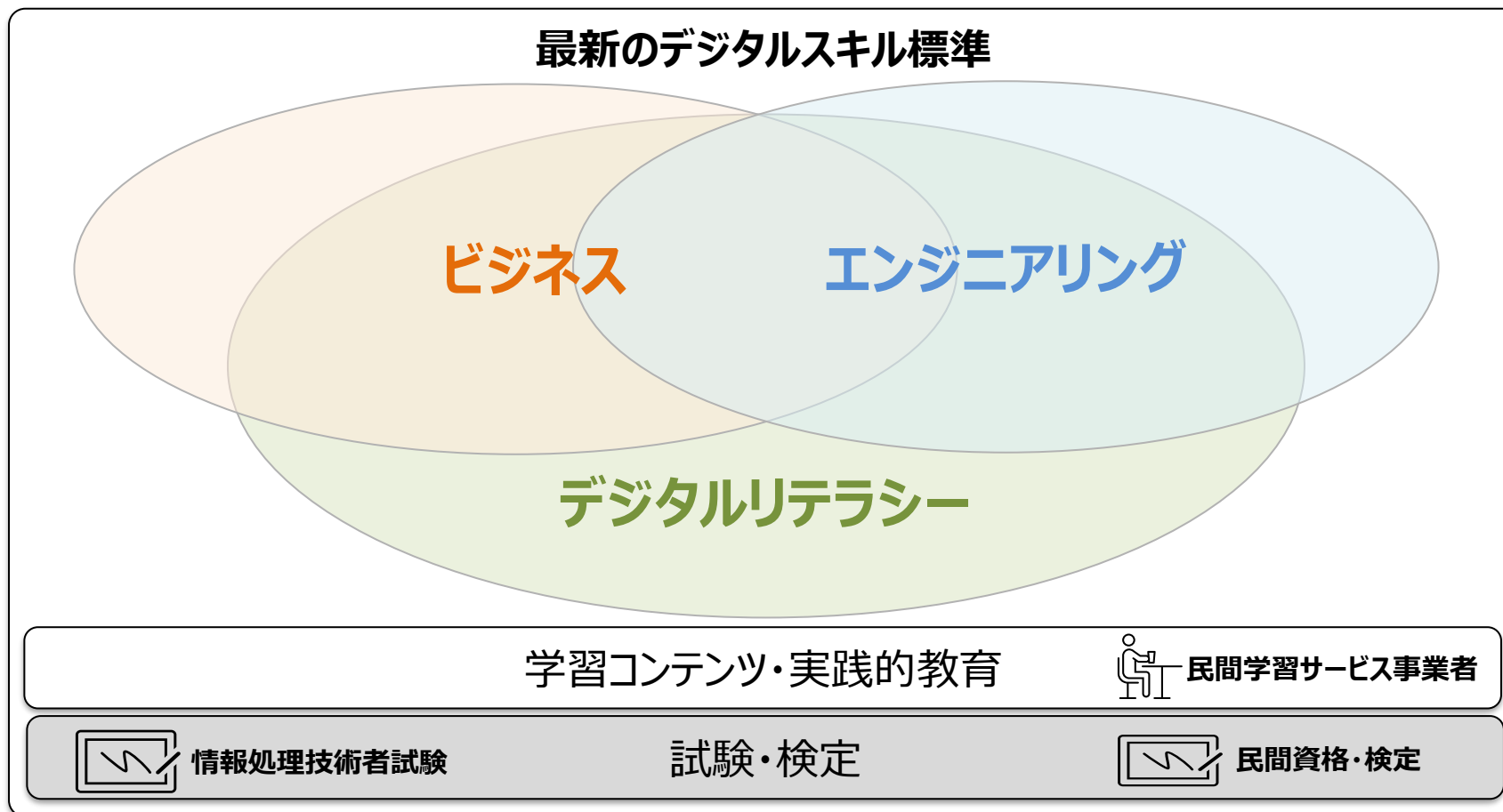
【研修事業者】デジタルスキル標準に基づく
リスキング支援・市場の拡大

【企業】デジタルスキル標準に基づく人
材育成・人材の確保

スキルが
労働市場の
「共通言語」
となる世界

Society5.0時代に向けた人材育成の体系

- あらゆる主体がデータでつながり、経済社会がデータで駆動されるSociety 5.0時代に向けて、**人材育成は「ビジネス」、「エンジニアリング」、「リテラシー」の領域においてそれぞれ強化する必要。**
- 情報処理技術者試験**を通じて新しい人材育成体系を実現し、民間学習サービスの発展を促す。
- 育成体系の基盤として、**国は技術革新を踏まえ、最新のデジタルスキル標準を提供していく。**



方針 1：今後のデジタルリテラシーの範囲と対象

- 政府は、デジタル推進人材230万人育成目標を掲げ、関係省庁横断で取り組んでいるが、足下でのデジタル人材の不足感はむしろ高まっている。生産年齢人口の減少や高度なデジタル社会であるSociety 5.0の到来を念頭に、全ての人々がデジタルに関する基礎的な知識やスキルを身に付け、デジタルで価値創造できる人材の裾野拡大を図る必要がある。
- 今日、デジタル技術が広く生活に組み込まれ、スマートフォンを通じた情報発信が当たり前になった。生成AIの普及は自然言語でデジタル技術を操ることを可能にした。デジタル技術がもたらす社会変化に対応するためには、デジタル技術を正しく理解し活用する力を備えるべく、変化をいとわず学び続けることが必要。
- 今後も進化を続けるデジタル社会において、これから社会に出る学生も含めた全ての人々が、デジタル技術を正しく、抵抗なく活用するためにも、基礎的な知識・スキルの習得や、変革への受容性を高め、新たな価値を生み出す基礎としてのマインド・スタンスを備えるべきではないか。
- こうした社会全体でデジタルリテラシーを学ぶ環境作りは、近年充実が見られる若年層のデジタル教育が社会と接続するための基盤となり、社会全体でデジタル技術の受容性を高めることにも繋がるものと考えられる。

方針2：リテラシー教育の受け皿としての情報処理技術者試験

- ITパスポート試験は、情報処理技術者試験の中でも最大の応募者を持ち、近年はDXの主役である非IT系企業、特に金融・保険業からの受験が増加するなど、幅広い業種における人材育成に寄与。しかし、デジタル技術の普及と共に不足感が高まるデジタル人材の裾野拡大を図るためには、これまでを大きく超える規模の応募者を獲得していく必要。そのためには、金融・保険業以外の非IT系業種（製造業・サービス業等）や、今現在デジタルに関心のない（だが仕事では当たり前デジタル技術を使っている）人々も含め、業種を問わずあらゆる企業・業種で働く人々、そして、高校生も含めこれから社会に出る学生に対してアプローチしていく必要がある。
- ITパスポート試験は、期待する技術水準として、「情報機器及びシステムの把握や、情報技術を活用した担当業務の遂行及び情報化を推進するための基礎的な知識をもつこと」として創設された。今日では、DX推進や生成AI活用に関する知識に加え、これらを受け入れるためのマインド・スタンスや、デジタル社会におけるモラル・マナーが求められるところ、来たるべきSociety5.0に向けて学ぶべき内容をアップデートする必要がある。
- したがって、既存のITパスポート試験について、最新の技術動向を踏まえて常にアップデートされる「デジタルリテラシー標準」（DXリテラシー標準）をベースに出題内容の見直しを行う。見直しにあたっては、これまでデジタルに関心のない層や高校生にも受験を促すことを考慮した試験問題とする。また、回答を活用したアセスメント機能の検討、受験促進のための広報、さらなる受験環境の改善、利便性の向上等にも取り組む。

デジタルリテラシー

当該分野の課題・強化の必要性

- 若年層を含む**全ての人が、変化を敏感に捉え受容するマインド・スタンス**や、変革の道具となるデジタル技術の基礎的な知識を身につけ、**価値創造できる人材の裾野拡大を図る**ことが必要。
- また、情報受信においても、デジタル社会の一員としてデジタル空間における情報流通の仕組みやリスク・問題を理解し、行動できることが求められている。

目指すべき人材像

- **変革を受容し新たな価値を生み出す基礎としてのマインド・スタンスを備え、学び続け、社会変化に向き合っていく人材。**
- デジタル技術を正しく理解し、抵抗なく活用するための**基礎的な知識、情報倫理（モラル・マナー）**を備える人材。

—— **DXリテラシー標準の全体像** ——

Why DXの背景	What DXで活用される データ・技術	How データ・技術の 利活用
社会、顧客・ユーザー、競争環境の変化	ビジネスの場で活用されているデータやデジタル技術	データやデジタル技術の利用方法、活用事例、留意点

マインド・スタンス

社会変化の中で新たな価値を生み出すために必要な
意識・姿勢・行動

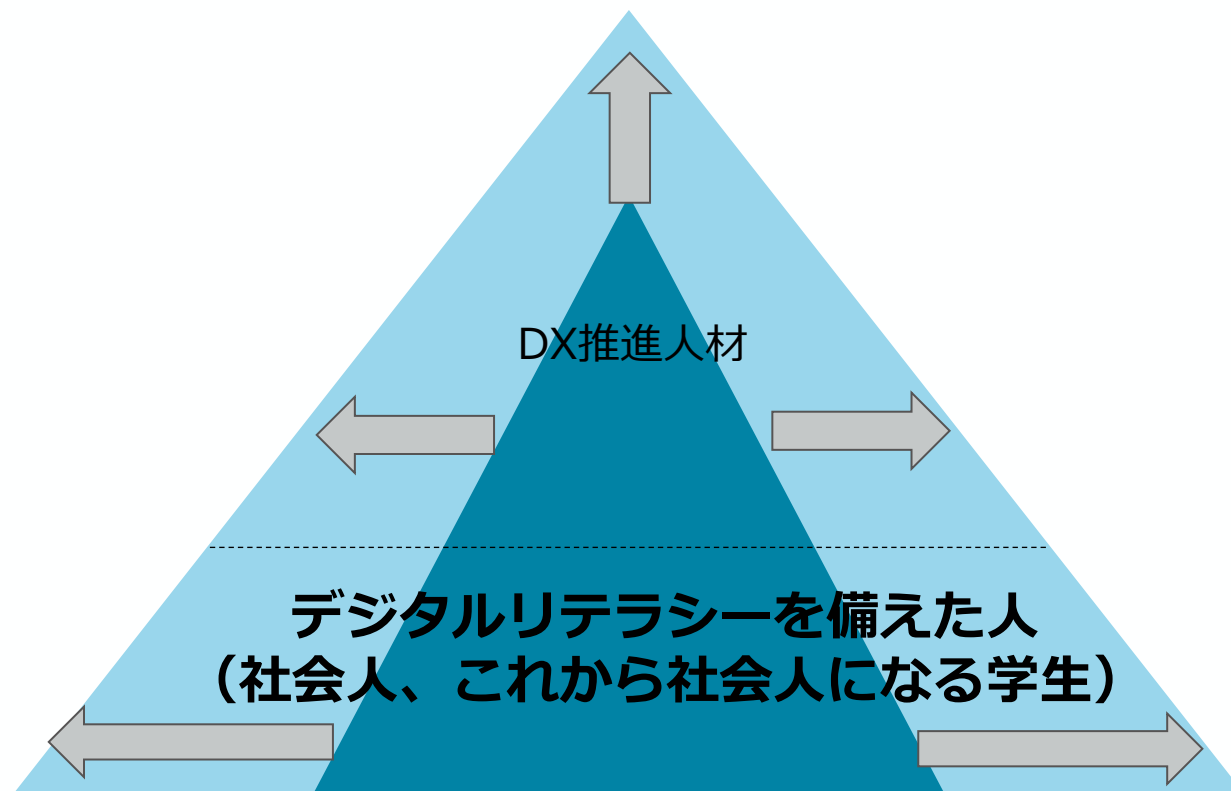
スキル学習の方法

- デジタルリテラシーは全ての社会人やこれから社会人になる学生が習得すべきスキル。全ての社会人・学生の土台となる基礎力として、**次なる各分野・領域への学習のスタートライン**として位置づける。
- **ITパスポート試験の出題内容**を、一人ひとりに必要となるマインド・スタンスや知識・スキルを示した学びの指針である**DXリテラシー標準をベースに出題内容を見直し、「デジタルを活用する目線」を育てる試験へのアップデートを目指す**。また、あらゆる層への受験促進のための取組も併せて検討。
- 試験で問にくいマインド・スタンスに関しては、アセスメントを通じた適正判断なども含めて検討を深める。
- 民間が提供する学習コンテンツや実践的な体験を伴う伴走型研修などとの補完関係を通じて、リテラシーレベルの学習意欲の向上を目指す。

デジタルリテラシー

当該分野の課題・強化の必要性

- 若年層を含む**全ての人**が、**変化を敏感に捉え受容するマインド・スタンス**や、**変革の道具となるデジタル技術の基礎的な知識**を身につけ、**価値創造できる人材の裾野拡大を図る**ことが必要。
- また、情報受信においても、デジタル社会の一員としてデジタル空間における情報流通の仕組みやリスク・問題を理解し、行動できることが求められている。



デジタルリテラシー

当該分野の課題・強化の必要性

- 若年層を含む**全ての人が、変化を敏感に捉え受容するマインド・スタンス**や、変革の道具となるデジタル技術の基礎的な知識を身につけ、**価値創造できる人材の裾野拡大を図る**ことが必要。
- また、情報受信においても、デジタル社会の一員としてデジタル空間における情報流通の仕組みやリスク・問題を理解し、行動できることが求められている。

目指すべき人材像

- **変革を受容し新たな価値を生み出す基礎としてのマインド・スタンスを備え、学び続け、社会変化に向き合っていく人材。**
- デジタル技術を正しく理解し、抵抗なく活用するための**基礎的な知識、情報倫理（モラル・マナー）**を備える人材。
—— **DXリテラシー標準の全体像** ——

デジタルリテラシー

Why DXの背景

社会、顧客・ユーザー、競争環境の変化

What DXで活用されるデータ・技術

ビジネスの場で活用されているデータやデジタル技術

How データ・技術の利活用

データやデジタル技術の利用方法、活用事例、留意点

マインド・スタンス

社会変化の中で新たな価値を生み出すために必要な意識・姿勢・行動

スキル学習の方法

- デジタルリテラシーは全ての社会人やこれから社会人になる学生が習得すべきスキル。全ての社会人・学生の土台となる基礎力として、**次なる各分野・領域への学習のスタートライン**として位置づける。
- **ITパスポート試験の出題内容**を、一人ひとりに必要となるマインド・スタンスや知識・スキルを示した学びの指針である**DXリテラシー標準をベースに出題内容を見直し、「デジタルを活用する目線」を育てる試験へのアップデートを目指す**。また、あらゆる層への受験促進のための取組も併せて検討。
- 試験で問にくいマインド・スタンスに関しては、アセスメントを通じた適正判断なども含めて検討を深める。
- 民間が提供する学習コンテンツや実践的な体験を伴う伴走型研修などとの補完関係を通じて、リテラシーレベルの学習意欲の向上を目指す。

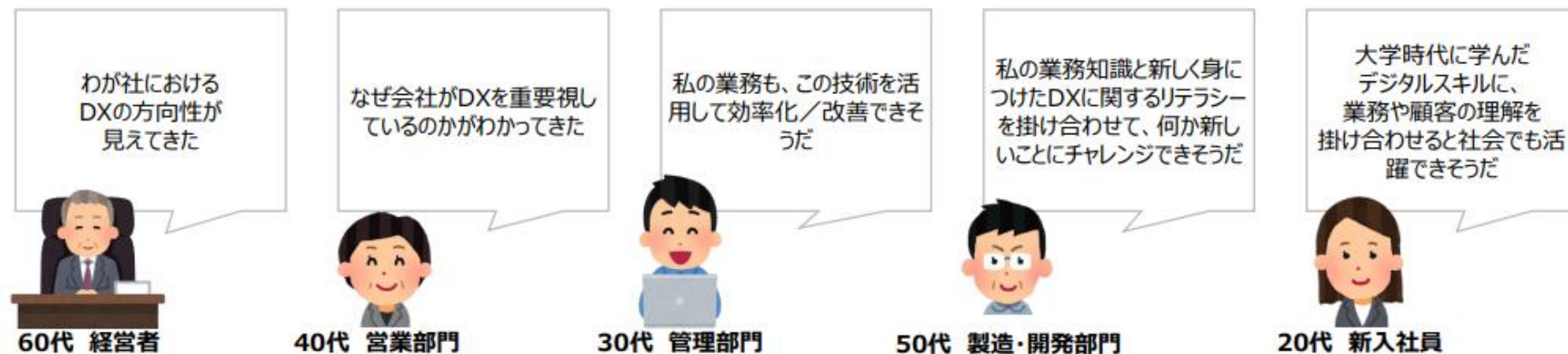
デジタルリテラシー

当該分野の課題・強化の必要性

- 若年層を含む**全ての人**が、**変化を敏感に捉え受容するマインド・スタンス**や、**変革の道具となるデジタル技術の基礎的な知識を身につけ、価値創造できる人材の裾野拡大を図る**ことが必要。
- また、情報受信においても、デジタル社会の一員としてデジタル空間における情報流通の仕組みやリスク・問題を理解し、行動できることが求められている。

目指すべき人材像

- **変革を受容し新たな価値を生み出す基礎としてのマインド・スタンスを備え、学び続け、社会変化に向き合っていく人材。**
- **デジタル技術を正しく理解し、抵抗なく活用するための基礎的な知識、情報倫理（モラル・マナー）を備える人材。**



DXリテラシー標準—DXに関するリテラシーを身につけた人材イメージ

デジタルスキル標準（DSS） <https://www.ipa.go.jp/jinzai/skill-standard/dss/>

デジタルリテラシー

当該分野の課題・強化の必要性

- 若年層を含む**全ての人が、変化を敏感に捉え受容するマインド・スタンス**や、変革の道具となるデジタル技術の基礎的な知識を身につけ、**価値創造できる人材の裾野拡大を図る**ことが必要。
- また、情報受信においても、デジタル社会の一員としてデジタル空間における情報流通の仕組みやリスク・問題を理解し、行動できることが求められている。

目指すべき人材像

- **変革を受容し新たな価値を生み出す基礎としてのマインド・スタンスを備え、学び続け、社会変化に向き合っていく人材。**
- デジタル技術を正しく理解し、抵抗なく活用するための**基礎的な知識、情報倫理（モラル・マナー）**を備える人材。
—— **DXリテラシー標準の全体像** ——

デジタルリテラシー

Why DXの背景

社会、顧客・ユーザー、競争環境の変化

What DXで活用されるデータ・技術

ビジネスの場で活用されているデータやデジタル技術

How データ・技術の利活用

データやデジタル技術の利用方法、活用事例、留意点

マインド・スタンス

社会変化の中で新たな価値を生み出すために必要な意識・姿勢・行動

スキル学習の方法

- デジタルリテラシーは全ての社会人やこれから社会人になる学生が習得すべきスキル。全ての社会人・学生の土台となる基礎力として、**次なる各分野・領域への学習のスタートライン**として位置づける。
- **ITパスポート試験の出題内容**を、一人ひとりに必要となるマインド・スタンスや知識・スキルを示した学びの指針である**DXリテラシー標準をベースに出題内容を見直し、「デジタルを活用する目線」を育てる試験へのアップデートを目指す**。また、あらゆる層への受験促進のための取組も併せて検討。
- 試験で問にくいマインド・スタンスに関しては、アセスメントを通じた適正判断なども含めて検討を深める。
- 民間が提供する学習コンテンツや実践的な体験を伴う伴走型研修などとの補完関係を通じて、リテラシーレベルの学習意欲の向上を目指す。

DXリテラシー標準（DSS-L）の全体像

- 「DXリテラシー標準」は、働き手一人ひとりがDXに参画し、その成果を仕事や生活で役立てるうえで必要となるマインド・スタンスや知識・スキルを示す、学びの指針として策定。

標準策定のねらい

働き手一人ひとりが「DXリテラシー」を身につけることで、DXを自分事ととらえ、変革に向けて行動できるようになる

Why

DXの背景

- ✓ DXの重要性を理解するために必要な、社会、顧客・ユーザー、競争環境の変化に関する知識を定義
- DXリテラシーとして身に付けるべき知識の学習の指針とする

What

DXで活用される
データ・技術

- ✓ ビジネスの場で活用されているデータやデジタル技術に関する知識を定義
- DXリテラシーとして身に付けるべき知識の学習の指針とする

How

データ・技術の活用

- ✓ ビジネスの場でデータやデジタル技術を活用する方法や留意点に関する知識を定義
- DXリテラシーとして身に付けるべき知識の学習の指針とする

マインド・スタンス

- ✓ 社会変化の中で新たな価値を生み出すために必要な意識・姿勢・行動を定義
- 個人が自身の行動を振り返るための指針かつ、組織・企業がDX推進や持続的成長を実現するために、構成員に求める意識・姿勢・行動を検討する指針とする

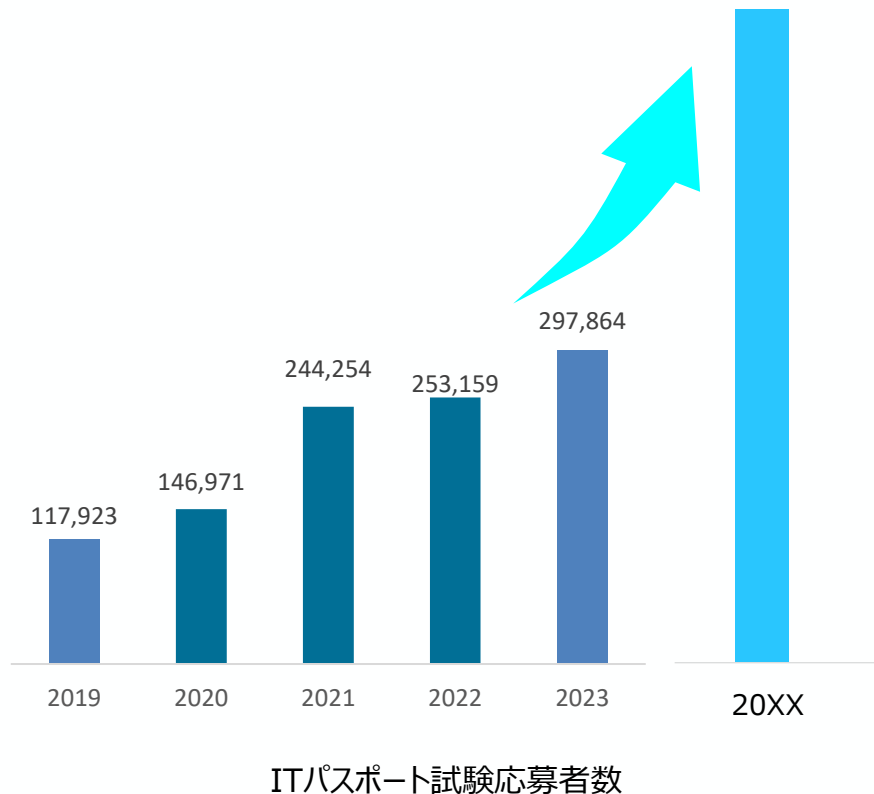
デジタルリテラシー

当該分野の課題・強化の必要性

- 若年層を含む**全ての人**が、**変化を敏感に捉え受容するマインド・スタンス**や、変革の道具となるデジタル技術の基礎的な知識を身につけ、**価値創造できる人材の裾野拡大を図る**ことが必要。
- また、情報受信においても、デジタル社会の一員としてデジタル空間における情報流通の仕組みやリスク・問題を理解し、行動できることが求められている。

スキル学習の方法

- デジタルリテラシーは全ての社会人やこれから社会人になる学生が習得すべきスキル。全ての社会人・学生の土台となる基礎力として、**次なる各分野・領域への学習のスタートライン**として位置づける。
- **ITパスポート試験の出題内容**を、一人ひとりに必要となるマインド・スタンスや知識・スキルを示した学びの指針である**DXリテラシー標準をベースに出題内容を見直し、「デジタルを活用する目線」を育てる試験へのアップデートを目指す**。また、あらゆる層への受験促進のための取組も併せて検討。
- 試験で問いにくいマインド・スタンスに関しては、アセスメントを通じた適正判断なども含めて検討を深める。
- 民間が提供する学習コンテンツや実践的な体験を伴う伴走型研修などとの補完関係を通じて、リテラシーレベルの学習意欲の向上を目指す。

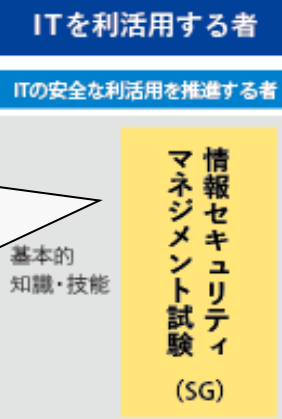


參考資料

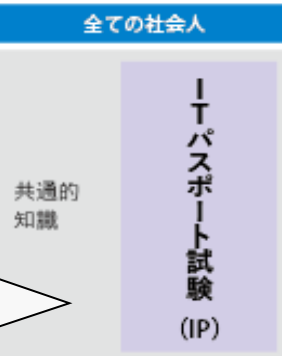
情報処理技術者試験・情報処理安全確保支援士試験

- 国内最大級の国家試験（年68万人応募）、R5FY合格者24.6万人（ITパスポート13.3万、他11.3万）。
- ITパスポート、基本情報、セキュリティマネジメント試験は、CBT方式で通年試験。
- 情報システムを構築・運用する「技術者」から、利用する「エンドユーザー」まで、幅広いIT人材を対象に、ITに関する知識・技能を客観的に評価し、人材育成・確保に貢献。
- DX推進を担う人材に必要な素養やスキルに対応するよう、生成AIなど出題内容の見直しを随時実施。

情報システムの利用部門で情報セキュリティリーダーとして、情報セキュリティが確保された状況を実現し、維持・改善する人向け



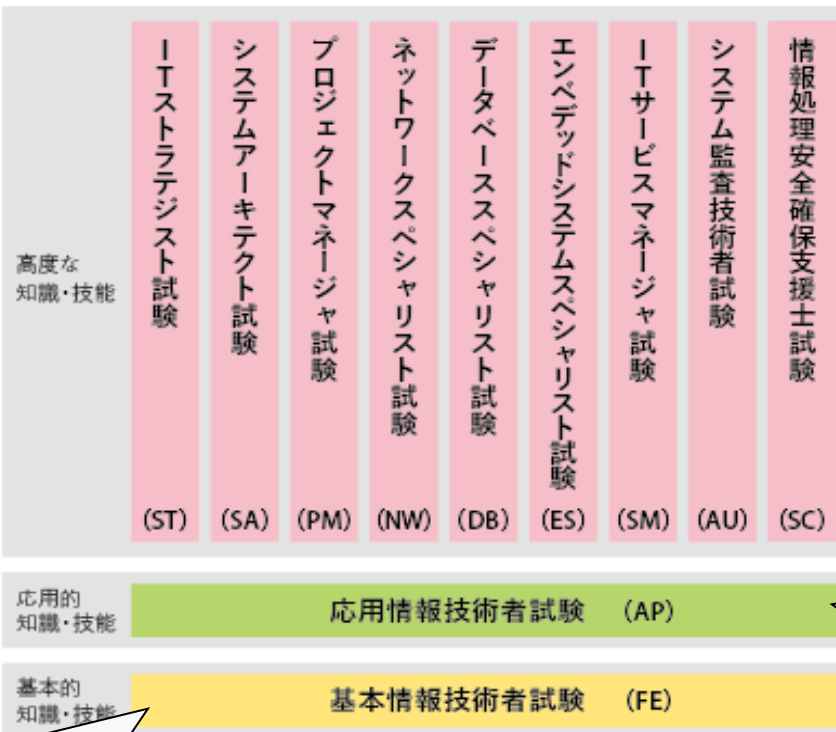
令和5年度 応募者数 約4.0万人
合格者数 約2.6万人



職業人が共通に備えておくべき情報技術に関する基礎的な知識の確認であり、全ての社会人向け

令和5年度 応募者数 約29.8万人
合格者数 約13.3万人

情報処理技術者



高度デジタル人材として確立した専門分野を持った人向け

令和5年度 応募者数 約9.9万人
合格者数 約1.2万人

高度デジタル人材となるために必要な応用的知識・技能をもち、高度IT人材としての方向性を確立した人向け

令和5年度 応募者数 約10.6万人
合格者数 約1.8万人

高度デジタル人材となるために必要な基本的知識・技能をもち、実践的な活用能力を身に付けた人向け

令和5年度 応募者数 約14.1万人
合格者数 約5.7万人

DSS-Lの構造

Why DXの背景

社会の変化
顧客価値の変化
競争環境の変化

What DXで活用されるデータ・技術

データ	社会におけるデータ
	データを読む・説明する
	データを扱う
	データによって判断する
デジタル 技術	AI
	クラウド
	ハードウェア・ソフトウェア
	ネットワーク

How データ・技術の利活用

活用事例・ 利用方法	データ・デジタル技術の活用事例
	ツール利用
留意点	セキュリティ
	モラル
	コンプライアンス

マインド・スタンス

デザイン思考／アジャイルな働き方

新たな価値を生み出す
基礎としてのマインド・スタンス

顧客・ユーザーへの共感	常識にとらわれない発想	反復的なアプローチ	
変化への適応	コラボレーション	柔軟な意思決定	事実に基づく判断